

## 【完了したプロジェクト】元子ども兵及び紛争被害者支援のためのパイロットプロジェクト

すべての生命が安心して生活できる社会の実現をめざして



プロジェクト名	コンゴ東部地域における元子ども兵及び紛争被害者支援のためのパイロットプロジェクト
実施地域	コンゴ民主共和国 南キブ州 カレへ行政区カロンゲ区域
実施期間	12ヶ月（2007年4月～2008年3月）完了
ターゲットグループ	元子ども兵士／社会的弱者（孤児、性的暴力の被害女性、最貧困層住民）／カロンゲ地区住民
受益者数 (支援を受ける人の数)	直接受益者: 42名(元子ども兵9名、孤児10名、性的暴力の被害女性23名) 間接受益者: 約100名
プロジェクト目標	元子ども兵及び性的暴力を受けた女性などの社会的弱者が職業技術を身につけ、その技術により他のコミュニティー住民へ何らかの貢献がなされる。

### ■ 実施の背景



南キブ州のカロンゲ区域でのニーズ調査(どのような支援が求められているかの調査)をパートナー団体と共に行いました。その中で強く指摘されたことは、食料配布などの短期的な(物資を供与する)支援だけではなく、長期的に住民が生活を再建していくための「自立支援」の重要性でした。

対象地域では、長年の紛争で住民たちは、外部からの援助に依存しがちです。また、援助機関からの食糧や生活用品などの物資支援は、治安や資金不足、道路状況などによって不安定で、それだけでは安定した生活を確保することはできません。ニーズ調査に応じてくれた伝統リーダー(首長)(右から2番目)



特にカロンゲ区域は、幹線道路から外れた場所に位置しており、都市部からのアクセスが途絶えることもめずらしくありません。

紛争下で、畑を耕すことを止めて、鉱物資源ビジネスに関わったり、援助物資に頼って生活していた人々は、その不安定な生活から

抜け出したいという思いと、目先のお金や援助物資への依存から抜け出せないという矛盾した思いを抱えていました。

現地のニーズについて共有する為に集まってくれたカロンゲ住民  
(性的暴力を受けた女性を含む約 50 人が参加)

同地域の行政機関のリーダーや、主要民族の伝統リーダーとの話し合いの中でも、「援助機関の外国人は、まるで我々の指導者のように振舞うが、治安が少し悪くなると、すぐに帰ってしまう。

残された自分たちは住民の期待にこたえることも出来ず、無力だと非難される」と、援助のあり方を批判しながらも、「今、私たちに必要なのは、自分たち自身の力で生活を支える能力であり技術である。

そのための支援であれば我々は心から歓迎する。」と話していました。



肥沃な土地に恵まれたカロンゲの農地

カロンゲ区域にはタンタル鉱石など豊富な鉱物資源もありますが、同時に肥沃な土地と水に恵まれた場所でもあり、元々、そこに住む人々は農耕を営み、様々な穀物や野菜など自給用の食糧を生産していました。

調査時点(2007年3月)でも、実際に多くの住民は不定期に援助物資を受け取りながらも、普段は町や農村で農作物の栽培や収入を得るための活動を始めていました。

一方、武装勢力による食料の略奪などによって不安定な生活を送っていたことに変わりはなく、栄養失調などで子どもの死亡率も高く、雇用(収入)の機会もほとんどありませんでした。

特に、元子ども兵や性的暴力を受けた女性などの社会的弱者は、農作物を栽培することも、町で収入を得ることも全くできない状況にありました。

こうした調査を基に、パートナー団体とともに現地の人々が生活を安定させていくための

パイロット(試験的)プロジェクトを開始することになりました。

## ■ プロジェクトの概要(成果)



南キブ州のカロンゲ区域にて、洋裁及び木工大工の技術を身につけるための簡易の職業訓練所が、住民の自主努力によって建設されました。

そこで、元子ども兵及び紛争被害者が職業技術を身につけ、さらに、その技術によって、地元病院のベッドを製作するなど、コミュニティに対しての支援が行われました。

← 悪路で土砂を除きながら資材を運搬する現地住民ボランティア達

## (1) 現地住民たちの力で職業訓練施設が完成

職業訓練を行うために必要な簡易施設が完成しました。  
この施設建設には、当会から木材などの建設資材や資源運搬費用など必要最低限のサポートを行い、残りの建設作業や資材調達などの労働力は住民たちが無償で提供しました。

建設作業に関わったのは、完成後の施設で訓練を受ける元子ども兵たちに加え、GRAM 職員や自立支援の重要性を理解してくれた近隣の住民達が協力してくれました。



建設作業に関わる元子ども兵と現地住民



屋根工事が始まった時の様子

また、作業員の昼食なども近隣住民の女性が調理してくれるなど、多くの人々がプロジェクトにボランティアとして関わってくれました。

完成した建物は、簡易の木造建て 8m × 13m の大きさを、洋裁訓練と木工大工の訓練を行う2つの教室で構成されています。

壁は吹き抜けで、整備されたマシンや木工用具などの備品は、となりの GRAM カロ  
ンゲ事務所の倉庫で保管・管理されています。



完成した簡易の職業訓練施設



木工大工訓練用の教室



## (2)元子ども兵及び紛争被害者が職業技術を習得



木工大工の訓練を受けた元子ども兵たち

完成した施設で、計 42 名(元子ども兵 15 名、性的被害を受けた女性 17 名、紛争で両親を失った孤児 10 名)に対して、洋裁または木工大工の職業訓練を行いました。

最終的に、35 名が 7 ヶ月間の訓練を修了することができました。  
残りの 7 名は、訓練施設への道中の治安状況、または近隣で宿泊する場所が確保できず、途中で訓練を中断せざるを得ませんでした。



洋裁訓練を受けた性的暴力を受けた女性たち

短期受益者(主に性的暴力を受けた女性)は、地元住民が日常身につけるアフリカンドレスや子ども服を製作できるようになりました。間の訓練でしたが、木工大工の訓練を受けた受益者(主に元少年兵)は椅子、机、ベッド、日用品などを製作できるようになり、製作された衣服は、地域の最貧困層の家庭に届けられ、木工大工で製作された家具は、地元の病院など公共施設へ寄贈されました。



完成した家具を見せる元子ども兵と指導員(左端)



洋裁訓練で完成した製品を見せる女性たち



訓練の評価など書類の準備をする GRAM 職員と当会職員(中央)



洋裁訓練で完成したシャツをプレゼントされ身につける当会職員



### (3)プロジェクトの評価(今後の課題)

プロジェクト完了後、受益者や現地住民からの意見を基に GRAM 職員と活動の成果や今後の課題について、話し合いました。  
その中で、下記の意見が出されました。

「多くの住民が援助機関からの支援に依存しきっている当地で、住民自らが建設作業に自主的に関わってくれたことは、画期的なことであり高く評価できる。

また、これまで何も生産的な活動をする事ができなかった元子ども兵や紛争被害者が、職業技術を身につけて、実際に製品を完成させたことは社会復帰の大きな一歩となった。

同時に、これまで自分の存在を否定したり、ネガティブな考え方に支配されがちだった

彼ら彼女らが自らの力でコミュニティーに貢献することができたことは、本人たちが存在意義を見出すことにもつながり、心理社会的にも効果があったのではないか。」

等々の意見が挙がりました。

一方、課題としては、「資金不足により、職業訓練のための資機材を十分にそろえることができず、洋裁訓練では足踏みミシン 1 台を 5 人が共有して使うなどの状況であったため、今後、訓練の「量と質」を上げていくために十分な資金調達を行っていく必要がある。

また、プロジェクトを運営していくうえで、GRAM のオフィス器具の整備、現地職員の能力向上、安全な移動手段の確保、また遠方から訓練に通う受益者の宿泊所を確保し

ていくことが必要」等々の課題が挙げられました。

これから、規模を広げてプロジェクトを展開していく際には、「健康を維持する為の啓発活動やマラリア予防、医薬品の支給などを他の人道援助機関と調整しながら行っていくこと、同時に、住民をエンパワーメントしながら農業を主体に自給食料を住民自らの力で確保していくための支援、収入源を確保するための職業訓練等々、『人道支援』と『自立支援』を組み合わせながらアプローチ(支援)していくことが重要であるとの見解が示されました。

以上の意見を踏まえて、フェーズⅠ、フェーズⅡのプロジェクトが立案されました。